

田中ORT(視能訓練士)のちょっといい話

見えるってどういうこと？～視覚のはたらき

今回は第4弾で、「解像度不足(1)子どもに眼帯は厳禁！～医学的弱視」についてお届けします。

画質の悪いデジカメ写真を想像してください。低画質モードで撮影したり、明るさの条件が悪ければ、いくらピントが合ってもきれいな写真になりませんよね。人間の目でも、いくらメガネの度を調整しても(ピントを合わせても)十分な視力が出ない、見る力そのものが弱いことがあります。その原因を考えていきます。

今回のお話は「医学的弱視」です。「機能弱視」とも呼ばれ、眼球自体には病気がないのに見る力が発達していないものを言います。



メガネかけても
見えないよお

赤ちゃんは、生まれたときはぼんやりとしか見えていません。なぜなら、視覚を初め、感覚は経験によって発達しますが、お腹の中は暗闇で胎児はものを見たことがないからです。お腹の中で様々な音を聞き、生まれたときからほぼ完成している聴覚とは対照的です。生まれたとき、眼球そのものや脳への道筋は完成していますから、赤ちゃんは目に映った情報をどんどん送り込んで脳を刺激し、視覚中枢を鍛え、急速に視力が発達していきます。発達スピードは1歳半頃がピークで、その後はゆるやかになって6歳頃にはほぼ完成します。身体の発達スピードとは随分違いますね。

発達のピークである1歳半を中心に3歳くらいまでは、目から入って脳に届く情報の質に敏感に反応します。クリアな情報を受け続けた脳は、それに反応して視力がぐんぐん発達しますが、クリアな情報が届かないと視力が発達しません。その原因は強い遠視や強い乱視、斜視などがあります。

強い遠視と乱視はどこにもピントが合わないため、脳に良い刺激が届きません。特に、度数に左右差が大きい場合は度の強い方の目はその影響を大きく受けます。また、どちらかの目が決まって内側または外側にずれている斜視では、二重に見える不快感を解消するため、その目からの情報を脳の方で抑制してしまうため、視力が発達しません。そして恐ろしいことに、発達期を過ぎてからそれらの原因が取り除かれたとしても、もう視力は発達しないのです！弱視の原因である屈折異常や斜視を早期に見つける最大のチャンスが3歳児健診です。3歳で見つければ治療に反応しますので、視力の発達が期待できます。一生の視力を左右する大事な機会を逃さないようにしましょう。3歳児健診前でも、目つきが気になったらぜひ眼科受診を。

なお、目からの情報を遮断する最大のものが眼帯です。視力の発達期では、わずか1日の眼帯でも弱視が発生することがあります。医師の指示なく眼帯をすることは絶対にやめましょう！

次回は、よく耳にする目の病気のお話をします。

< ORT : 田中 敦子 >